Architect at Home

穏やかな雪晴れの見学日和。織田さんに抱かれた愛犬と一緒に、パチリ！

織田憲嗣 森の中の一軒家

2002年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

建築家の宮脇檀さんがお元気だったころ、家具に関する公開座談会に招かれて、一緒に旭川に出かけたことがあります。

そのとき、旭川で2日間にわたってアテンドしてくれたのが、デザイナーで、イラストレーターで、世界的に有名な椅子のコレクターでもある織田憲嗣さんでした。織田さんは椅子好きを自認する宮脇さんと私のたっての希望を聞き入れてくれ、蒐集した膨大な量の椅子を保管している大きな倉庫をくまなく見学させてくれました。埃を嫌って、ひとつひとつを透明のビニール袋でふうわりと包んだ椅子が何段にもなって薄暗い倉庫の中に並んでいるさまは壮観でした。見渡す限りの椅子、椅子、椅子、椅子、椅子…私たちはさながら椅子の谷間に迷い込んだようでした。私と宮脇さんは、思わず目を見交わし、「すごいなあ」という意味を込めて無言でうなずき合いました。

織田さんの椅子のコレクションはそのときすでに1,000脚を超えていたと思いますが、その大きな倉庫の中にも全部は収まり切れていないというお話でした。

その日の午後は、そのころ計画中だった「椅子のミュージアム」の敷地予定地にも案内してもらいました。織田さんは、敷地に向かう車の中で、ミュージアムの構想を話してくれましたが、設計者としてデンマークの建築家、ハンナ・ケアホルムさん（若くして亡くなった天才的な家具デザイナー、ポール・ケアホルム氏の未亡人です）を考えているとのことでした。この話を聞いたとき、私の瞼の裏に、雑木林に囲まれた雪の斜面に建つデンマーク・モダンの瀟洒なミュージアムが、はっきり映しだされたように感じたことを、今でもよく憶えています。

□

織田さんからご自宅を建てる計画があることを聞いたのはその数年後でした。ただし「計画がある」といっても漠然としたものではなく、土地も決まっていましたし、設計の方も着々と進んでいる様子でした。

「まだ設計の途中ですが、建築家からなにかアドヴァイスをいただけませんか？」

織田さんはそう言って、丁寧に描き込まれた平面図のスケッチを見せてくれました。

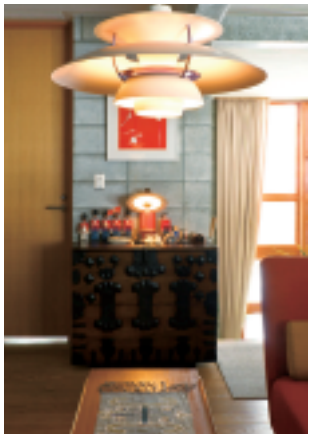
ところが、驚いたことにそのスケッチは、ほぼ完全に出来上がっていて、アドヴァイスどころではありません。各部屋にはどの椅子をどの位置に置くか、きちんとした縮尺で描かれていましたし（織田さんが正確に椅子を描くのは朝飯前ではありますが）、椅子だけではなくテーブルもキャビネットも、そのキャビネットの上に置く小物も、壁にかけるオブジェも、もうすべてが織田さんの頭の中では決まっている様子で、口を差し挟む余地などまったくありません。私はただ呆然とその美しいスケッチを眺めていたのですが、それではいかにも能がないと思い直して、寒冷地の建築は断熱性能が決め手になることを話し始め、すぐに、この話がまったく無意味であったことに気づきました。というのは、織田さんの相づちの言葉から、織田さんが建物の断熱方法についてもずいぶん勉強されていることを、察したからです。

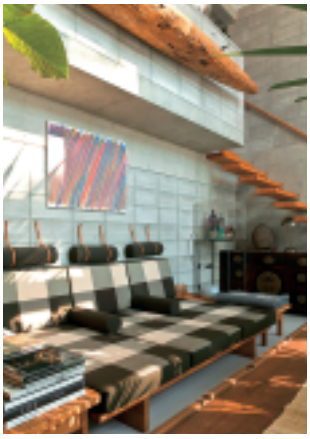
考えてみれば当然です。たしか、旭川といえば日本の最低気温が記録されたところだったはず。その旭川に長年暮らしている織田さんに、温暖な房総半島生まれの私が、寒冷地対策について話すなんて「釈迦に説法」そのものだったのです。

□

織田さんの自宅が完成して半年ほど経ったころ、たまたま旭川に行く機会があった私は、さっそく織田さんに連絡して新居を見学させてもらいました。以前見せてもらった図面について、はっきりとした記憶はありませんでしたが、どの椅子が、どの場所に置かれるかについてはおぼろげながら憶えていて、それが現実としてそのまま目の前にあることに感動を覚えました。織田さんは私のその気持ちを見透かしたようなタイミングで、「ぼくの場合、まず“椅子ありき”なんですよ」と告白口調で言われました。

このときの見学で印象的だったのは、椅子だけでなくカトラリーや食器・ガラス器などモダンデザインの日用品のコレクターだとばかり思っていた織田さんが、李朝の半閉（バンダヂ）などの古い家具なども身の回りに置いて見事に使いこなしていることでした。吹き抜けの壁には、木を刳りぬいて作った長さが5mほどもあるカヌー（丸木舟）が飾ってあったりしました。こうした古い家具や道具は、モダンデザインと上手に対比させつつ按配





左――ブロック壁を背にして置かれた李朝の半閉（バンダヂ）。上にはスカンジナビアのオモチャの兵隊が整列している
右――吹き抜けのある1階のコーナーは、どこか隠れ家的な居心地の良さを持っている。ソファの上に見える流線型の木の固まりはカヌーの底面

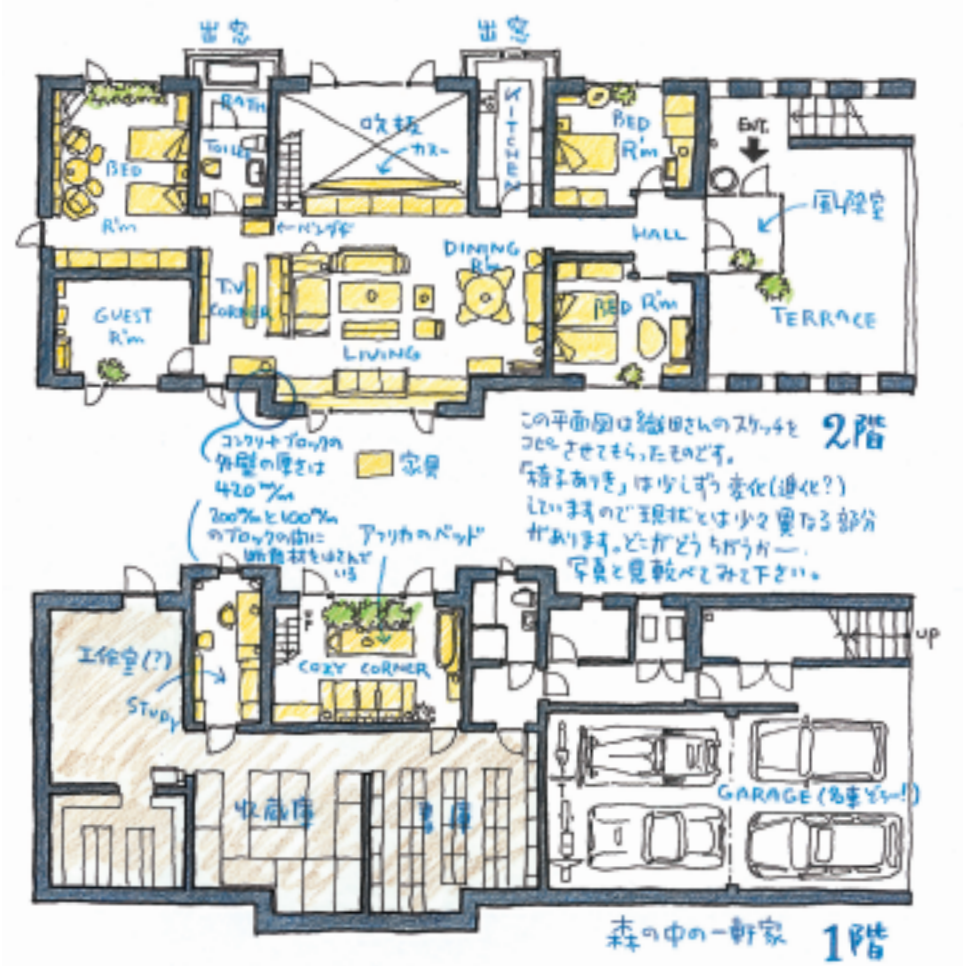
上――水平に拡がる広々とした室内はさながら家具や美しい日用品の展示室のよう。すべてが「モノ好き」なら思わず目がハートになるような逸品ぞろい
左――ゲストルームの森を眺めるピクチュア・ウインドに飾られた動物のオモチャ。雪原を大移動中

すれば、お互いに響きあい引き立てあうものだということも、はっきりと納得できます。分かりやすく言うと、選び抜いた古道具の名品を室内のしつらえのスパイスとして効かすのが織田さんのやり方らしいのです。

□

というわけで、私が織田さんの自宅を訪れるのは、今回の取材で2回目でした。織田さんのお宅を取材させてもらうなら、雪景色の冬にしたいと考えていましたが、訪れた日は前日まで吹雪だったことが信じられないほど、穏やかな雪晴れの見学日和でした。

織田さんとは久しぶりにお会いしたはずですが、再会してみると、つい3日前ぐらいに別れたばかりといった感じで、まったく以前と



左――ブロック壁と木製サッシュの窓、外の雪景色…まるで北欧です！
右――正面の飾り棚の向こうが、大きく吹き抜けていて、下には日溜まりになる居間のコーナーがある。手前はウェグナーの紐椅子、その手前、センターテーブルとして使われている古い家具は朝鮮李朝時代の櫃（だと思う）

変わらない物腰と話しぶりでした。

今回、織田邸に押しかけたメンバーは、編集者のMさん、カメラマンのAさん、友人の小泉誠君、そして私の4人でした。ひととおり初対面の挨拶が終わり、1階にある大きく吹き抜けた日溜まりの隠れ家のようなコーナーに落ち着きますと、織田さんは私たちに向かって、開口一番、「ぼくの場合、まず“椅子ありき”なんですよ」と言いました。言い回しもイントネーションも数年前、私が聞いたときと「まったく同じ！」でした。

織田さんの自宅を説明するのに、この言葉ぐらい簡潔、かつ的確な言葉は他にないことを、織田さん自身がよくご存じなのです。そして、この言葉を聞くと、こうした設計の仕方（発想の仕方と言った方がいいかも知れません）を、普通はあまりしないことにあらためて思いあたります。建物を設計するためには、まず敷地があり、地形を含む周辺の環境があり、法的な制限があり、用途別に必要な部屋の広さと数があり、構造計画、設備計画があり、予算の限度もある…といった具合に条件をひとつひとつクリアし、包囲網を次第次第にせばめていって空間構成や間取り（プラン）が決まっていくものです。そして最後の最後、「さあ、では、この部屋にはどんな椅子を置こうかな？」となるのです。

「椅子ありき」の話で、私が真っ先に思い出したのは、晩年、映画監督として活躍した伊丹十三さんの撮影日記の中に、キャスティングによって、まったく違う映画が出来上がってしまうと書かれていたことです。同様に考えると、織田さんは椅子という個性豊かな俳優たちを注意深くキャスティングすることで、織田さんならではの住宅という物語を作り上げていると言えるかも知れません。

具体的には「椅子ありき」の設計では、たとえば、食堂の椅子にポール・ケアホルムのPK-9を置こうと決めることから始まるのだと思います。ステンレスと革で作られたケアホルムの椅子は、軽快で強靭な印象ですから、どっしりした木製のテーブルは似合いません。やはり、同じデザイナーのテーブルが良かろうということになります。壁際にはお気に入りの小物を飾ったりするためのキャビネットが必要ですし、寒冷地ですから、食堂の脇には薪ストーブも欠かせません。そのストーブもやはりデンマーク製のモダンな箱型ということになりましょう。そのストーブを挟んで向こう側を居間のコーナーにすることにして、センターテーブル替わりに李朝の櫃を置き、椅子は、そう、ハンス・ウェグナーの紐椅子を2脚を揃えて置くのがいいでしょう。その正面の窓は外の雑木林の斜面を眺めるのに、ちょうどいいように慎重に幅と高さを考えて…といった具合に設計が進んでいったのだと思います。そのようにして完成した住宅は、文章なんかで紹介するより写真をご覧いただく方が手っ取り早いはずです。カメラマンのAさんも、「このお宅はどこを撮っても写真になるから…」と興奮気味で、ここと思えば、またあちら、という具合にせわしなく場所を替えてはカメラを構えています。

家具ばかりでなく美しい日用品のミュージアムのような室内には、デンマークの空気、北欧の匂いも一杯に詰まっていることを読者にお伝えしておかなくてはなりません。その家の中を鵜の目鷹の目で歩き回って、コレクションの質の高さと量の多さに圧倒され、すっかり満腹した私たちは、白銀に囲まれた外部に出て、胸いっぱいに雪景色を吸い込みました。

雪景色の中にたたずむ建物を眺めながら、私は、この建物に漂う「懐かしさ」と「既視感」の正体は一体なんだろうと、ぼんやり考えていました。そして突然、それが、かつて私の瞼の裏に浮かんだ雑木林に囲まれた雪の斜面に建つデンマーク・モダンの瀟洒な椅子のミュージアムだったことに思いあたり、胸の中でハタと膝を打ちました。✽

雑木林に囲まれた小高い丘の上に「森の中の一軒家」はある。長い長いアプローチの坂道を登ると、デンマーク・モダンの名作住宅を彷彿とさせる建物が出迎えてくれる

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972～74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976～80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社　2000）、『意中の建築 上・下』（新潮社　2005）などの著作がある。